

「遠く」の先には、何がある？

## ある人類学者の、人類学者へ至る旅

あんなものが見たい、こんなことを確かめたい  
そうした目的を持った旅人は、その過程で自己変容を繰り返す。  
旅の目的がつねにつくり変えられる旅の果てに  
たどり着いた人類学者の境地とは――？

文化人類学者

### 奥野克巳

●おくの・かつみ 1962年滋賀県生まれ。立教大学異文化コミュニケーション学部教授。『モノも石も死者も生きている世界の民から人類学者が教わったこと』『ありがとうもごめんなさいもいない森の民と暮らして人類学者が考えたこと』（暁記書房）など著作多数。

### 「日本脱出」のシヨック

私が大学生活を送り始めたのは一九八〇年代初めで、そのころ思い描いていた野望は「日本脱出」でした。大学に入ったら日本を脱出したい――そうふつふつと思うようになったのは高校生のころで、アメリカ留学の奨学金の残りで見学中を旅した

小田実の『何でも見てやろう』や、朝日新聞の記者だった本多勝一の『極限の民族』といった、旅行記やルポルタージュの影響が大きかったと思います。本を通じて、自分のいる世界がいかにかっぽけかを感じ知らされると同時に、日常的に暮らしている日本社会から遠く離れたところへ行きたいと思うようになったのです。

その「遠く」というのは、電車やバスが通っているような場所ではなく、もっと辺地に行きたい。大学入学を果たしてまず考えたのは、そのためにはどうすればいいかということ、スペイン語を勉強し、手始めに向かったのはアメリカでした。一九八二年のことです。当時、社会人類学者のエヴァンズ・プリチャードが監修した『世界の民族』という著

作も愛読していたのですが、その第四巻の巻末の民族一覧で知ったテペワノというメキシコの先住民族に会いに行くためでした。

当時はインターネットもありませんから、本にあった「彼らの住む土地にはメスキタルから行くことができる」との記述だけを頼りに、とり

ダグダしている様子に、アメリカ資本主義の影響を目の当たりにします。そこには、まさに南北問題があったわけです。



メキシコ・シエラマドレ山脈中のテペワノ (1982年)

あえずアメリカ西海岸のロサンゼルスへ。そこから南下し、国境を越えてメキシコへ入り、シエラマドレ山脈の麓に、メスキタルはありました。テペワノの居住地はさらに山奥で、現地の人に案内してもらい、ようやくたどり着くことができました。スペイン語もそれほど堪能ではなかったのですが、一カ月ほどの滞在では彼らの生活をそこまで深く掘り下げることはできなかったのですが、幻覚植物の吸引を体験したのに加えて、男たちがわずかな現金収入を酒に換え、購入したテープレコーダーで音楽を聴いたりして、昼間からゲ

人生初の「遠く」への旅から帰国した私を待っていたのは、逆カルチャーシヨックでした。カルチャーシヨックは、行った先の文化に打ちのめされること。一方で逆カルチャーシヨックは、行った先から普段生活している世界に戻ったときに、自分を取りまく文化にあらためて気づき、シヨックを受けること。これに私は打ちひしがれたのです。そこからは、スーザン・ジョージの『なぜ世界の半分が飢えるのか 食糧危機の構造』や、グンナー・ミユルダールの『アジアのドラマ 諸国民の貧困の一研究』など、読書のテーマも南北問題や貧困問題へと移っていく、海外協力を行うNGOの